



096755-000-5

特8-921

義士銘々伝

桃竜斎 梅玉 / 自講自記

M33

DBS-0477





義士銘々傳

義士銘々傳

第一 席

桃龍齋梅玉 自記

エ、今回は伊依頼に由つて義士銘々傳を講演いたします……とヤして銘々傳を一人々々に四十七人も講演いたしては中々大變なことで夫れ故殿中の乃傷から義士の打入り泉岳寺の切腹迄を大略言上いたします……エ、頃元祿十四年三月十一日之れは何時も年始の恒例となつて朝廷より幕府へ使節を降下しになる此時の勅使は柳原大納言資康卿以下二人で伊座いしました之れは幕府に取つて見ると實に大切なことで伊座いますッコで毎年の例となつて櫻應の役人と云ふ者をお撰びに相成りイト丁重に伊座走をいたします此時の接待役を仰せつかつたのが淺野内匠頭長矩に伊達左京亮宗春と云ふ此二人であつた内匠頭は一体斯ういふ大禮に不慣れの事故他の慣れたる方におす附けに相成るやうにと一旦は伊辭退をヤ上





義士四十  
余人吉良  
義英を  
討つ



ました所が大老方の仰せられるには 若ソリヤア内匠のすす所は尤な  
とだけれども未だ勅使下向までは暫らく間のある事夫れ迄に稽古をいた  
したなら出来んと云ふ事もあるまい夫れに毎年昔良上野介義英が師範役  
で如何に心得のあるものでも一度は上野介に尋ねて見なければ古禮が知  
れぬと云ふ位だ師範たる者が居つたなら別段差支へもあるまいが……  
内匠仰せ尤の次第謹んでお受けを申上るで御座いましやうと之から内  
匠頭はお受に相成り早速上野介に就て御稽古遊ばすといふやうな始末處  
が上野介と云ふ奴はナカノの物でツマリ賄賂次第で親切にも教へて  
遣るし粗賂にもすると云ふやうな譯夫れを兼てより知つて居る左京亮は  
少なからぬ金銀財寶をもつて禮を厚くし教へを受けたが内匠頭に於ては  
普通一般の送り物しか致さない夫れだものだから上野介のガリノ爺に  
やア氣に喰はないや 上なんだ吝嗇な之れ斗りの物を遣しやアがつて夫  
れで古禮を教へて呉れるも克く出来てやがるぞ心中大に不平を懐ひて居  
る處へ遣つて参つた内匠頭長矩迄か末座にさがつて勅使櫻應に就き古式

四

を質問ました處が上野介は余り宜い顔をして教へない 上イヤ拙者として  
も詳しい事は知らないので決してお教へずなと云ふ事は出来ません夫に  
何も此節は書籍して忘れたところもあるしするから困る……ダガマア  
折角だから心覺の所はお教へするうと苦り切つて云つて居りました

第一一席

内匠頭は至つて廉直な人物であるから賄賂が少なくつて上野介に斯んな  
不愛想をされるとは思はない夫れ故再三再四押し頼みますどころが果  
は上野介怒つて仕舞つた 上ヤア内匠頭如何にやしたところが知らぬ事  
は飽きでも知らぬとす外はあるまい重言やされな……サツサとお歸り  
召されど無禮極まる悪口を言はれたので平生短氣な長矩故カツと心中  
怒を發しアツと其儘歸つて仕舞つた併し克く……考へて見ると 内何  
も一旦勅使櫻應の役義お受けを致したからには是非共首尾よく相勤めね  
ばならぬ事夫に就ては古禮古式外に尋ねる人もない悪い乍らも上野介に

五



義士銘々傳

相談いたすより外はないと思ひ返し出を堪して上野介に尋ねました上野  
介とて多少共送り物を貰らつて見れば一から十まで知らん知らんと言つ  
て押し通す譯には宜かない夫れ故少し宛は教ゆる處があつたがナニシ  
肝心の勅使お迎への節になつて非常なる辱かしめを受けたから内匠頭も  
モ一我慢が出来なくなつて内己れ上野覺悟いたせと殿中をもわきまへ  
ず刀を抜いて斬り付けた所が其切先きが少しばかり額へ觸れたばかりで  
終に本意を遂げる丈けに斬り込めなかつた上野介は幾ら短氣な内匠頭で  
も日モヤ殿中に於て刃傷いたす杯の舉動はなからうと思ひましたに依り  
意地悪くもいたしましたもの今此有様に吃驚仰天狼狽まわつて上野人  
殺し……殿中を逃げ廻る内匠頭は再び刀を振り飛び懸りさま後ろか  
ら切り付けたが此時早く梶川與三兵衛飛んで参り内匠頭を抱き止めた  
内匠ヤア梶川武士の情けじやア此處放せエ、放さぬか……と互に争ふ其  
隙に上野介は漸くの事で遁れまして先づ命丈は助かつたが微に此事を開  
き門外に侍待をして居る仲間衆は大騒ぎだ ×殿中に刃傷があつたつ

義士銘々傳

てが何處の殿様だらうエ、ナイ三太お前は今の騒ぎを聞たかい ○ア、  
聞いた聞たにやア聞いたが人の噂にやア赤穂の殿様だといふ咄しだ ×  
ソ一カ夫れじやア宜いけれと俺ア宜い心配したせ……夫りやア而も何し  
ても赤穂様は大變な事になつたなアと孰れもワイ、騒ぎ出してアハ  
ヤ城間に押し入らん有様なり此時役人夫れへ見ねられまして 役ヤア、  
下郎共扣へろ……扣ると云つたところで中々一人や二人で制す  
事ア出来なない其内に二三の役人方が出張に相成り 役何れも狼狽騒ぐ  
事なかれ今日殿中にて刃傷を働さしは浅野内匠頭長矩なるを静まり居ら  
うと大音に呼ばはつたから何れも夫れで安心したと見えてシーンとして  
仕舞つたがサア赤穂の侍は此有様に膽をつぶし道々の体では屋敷へ立  
歸り此赴きを上ると浅野の家中は上を下への騒動此時ハヤ内匠頭は田  
村右京大夫の邸へお預けに相成り切腹仰せ付けられましたから本國へは  
早打を以つて此事注進に及ぶと赤穂の城中でも大騒ぎになつたケレども  
本國には大石内藏之助良雄と云ふ智勇兼備の老臣が居るゆへ最後の計は



傳々銘士義

既に胸中に浮んで居る一体吉良上野介へ送り物を致す時なども内匠頭に於ては老臣方へは相談になつたのです處が老臣方も田舎片氣の事と言ひ殊には上野介は慾の深い事を篤と知らぬ事と見へてか普通一般の送り物にて宜からうイツも典禮の古式以上野介が致せる事に極つて居るからと云ふやうな譯で更に頓着しなかつた夫れが抑も禍の基となつて此様騒動を來たしたのであります若しも此時大石良雄が江戸詰の家老であつたならば斯な事の取計らひは坐ながらにして知る事を得彦主君の生命を縮め且つは家中離散いたすやうな騒動を來さなかつたらうに實に惜しむべきの至りでありました

第三席

内匠頭は不敬の罪を以つて切腹せねばならぬ事になり且つ江戸邸は幕府へ没收せられ赤穂の城地も全くと沒收と云ふ事に相成りましたから赤穂城に於ても家老大石内藏之助を始めといはし家中惣出仕と云ふ事にて城

傳々銘士義

を此儘開渡すか左もなければ城を枕に打死するか二ツ一ツの評議であります處が世の中には鈍愚武士が多くして眞の忠臣と云ふものは誠に少ない第一大野九郎兵衛杯と云ふ奴は最初から逆尻を抱へて居る上へ立つ家老の位置に居る者からして此様鹽梅じやアモ一籠城なぞと云ふ事は逆も覺束ない尤も此評定と云ふものは最初より内藏之助の志ではない即ち忠不忠の家來を撰り分ける爲めの手段であつたので彦座います處が案の捉両端を挟むと云ふ人がチラホラ見ゆるに依り良雄然らば兎も角も城は開渡すと云ふ事に略決定いたしました併し城を枕に討死するといふ者があるならば明日の會議に出席いたすやうにと申渡しました處が世の中といふものは薄情なものが多いイザ討死となると誰一人吾れ先きに死のうといふものはなく俄か四十七人のみの外一人も寄り付くものがない良雄は天を仰いで歎息いたし良ア、世も徳季と相成つたわい……と之より四十七人の者に已れの腹中を打明け仇討の事を盟ひました夫れ故四月十八日城受取の役人出張に相成つた時何の違言もなく荒木十左衛門榊原采女等



傳々銘士義

に渡す事になつたが其時城内檢分いたしたる處實に整然として居るには驚き入つた程であつたと云ふこと以つて良雄の行き届いて居る事が解ります丁度其日申の刻に相成りまして腕坂淡路守木下肥後守等各士卒を引連れて城中へ這入つたが扱夫れに引き換へて赤穂の家中の者は何れも涙を呑み跡振り返つてはお城の見ゆるまでも名残りを惜み立去りました之れからと云ふものは孰れも浪人となりましたみとでありますから云は氣樂なやうなものだ併し茲に四十七義士に於ては如何にも仕て亡君の仇讐を討ち上野介の頭を擧げて墓前に手向けたいと思つて其苦心を曰ふものは一通りでない中にも首領大石良雄は京都の祇園あたへ入り込み唯シダラモなく遊蕩に暮して居るスルと敵からも良雄の舉動に目を附けて屢々間者が入り込む或時の事でした良雄は山科の寮から祇園の馴染の茶屋へ通はうとした時に向ふから酒に喰ひ酔つたる侍三人鼻唄まじりに來懸ります × エーイア、酔ふた〜酒と女が此世になけとやア樂しきと云ふものは外にないのう木本氏 ○ 左様〜上田氏の云ふ通り世の中

傳々銘士義

は酒だ〜ケレども其間へ女といふ甘味が這入らなければ兎角酒が理に落ちるとか又は乱暴でも仕懸けるとか余り克い事は仕ないものだ △ シテ見ると木本氏はヨク〜女には甘いと思はるな貴殿の如きは二本差すよりやア二本棒たらず方が善い位ものだ ○ 元戲給ふなソ〜拙者の顔を覗き込んだところで正逆に山車が通るやアしめいし〜時に各々先方から參つたのは例の内藏之助じやアあるまいか…… × 左様〜善い處で出逢した爰で逢ふとは百年目ドンな事をいたすか一ツ喧嘩を賣つて彼の胸中を試して遣らう 一同夫れが宜からう……と云ふんで忽ち相談が一決したソ〜大石内藏之助微醉機嫌の千鳥足 良ハア、吹けよ川風上れよすだれ……アコリア〜中のお方の顔憎くや……とかなんかど云ふのも面白いやアないかいな……ア痛い……アイタ……イタ、……之は恐れ入りますなア × コリや見れば両刀を帶する處は武士らしくもあるが武士には武士の法のあるもの何として此處を通らつしやる…… 良、イヤ之は恐れ入り奉る何も拙者を侍だなんぞと二本差して侍なら







出せ杯といつては余り弱味を付け込むと云ふもの併し半分貸して呉れる  
と云ふのなら咄しがわかつて居る半分貸して上げましやう………が何時  
返して下さるんだ 一同何時でも返していつに返さア早く出さないで之  
れだぞと突然鯉口を寛るげたにより 眞平「ハイ」眞平「免下さい身命あ  
つての物種だ借入用なら紙入ぐるみ上ましやうと両刀をソコへ追投り出  
し懐中物をなげ出して生酔本性違はず飛ぶが如くに祇園を指して参りま  
した跡で三人の者は両刀を改めて見ると斯は如何に錆きつて居る赤銅俵  
中物を改めて見ると茶屋女郎屋の貸付けと二三通の貸金の証文ばかりで  
あります 如何に各々方彼れの舉動を探るまでもありません武士の魂  
とも云ふ可き両刀は此通りモハヤ解り切つたもので珍座るて早速此赴き  
をば主君上野介殿に上げ安神いたすやうに致さうと云つて此場を立  
去つたが之れは吉良の間者で珍座いまして良雄は既に之れ等の様子を探  
り知つて居るゆへ裏の裏を掻いてワザと此様眞似をいたさ敵の眼をくら  
まして居るのである實に本望を遂げる迄の辛苦と云ふものは一方ならぬ

第五席

事でありました

赤穂の浪士は人知れず密々に姿を換へ吉良の様子を探りますところか  
愈々上野介には上杉の邸へ移ると云ふ事を承知したナニヨロ本所の屋敷  
に居て見れば良雄も謀を施し宜いが上杉家へ引き取られて見やア一  
大事だソコで全志の者江戸に會しいよ 十二月十四日夜の丑の刻に吉  
良邸へ切り入りました此晩は丁度雪の降り積つたる事とて仇を討つには  
持つて来いと云ふ晩だ大石良雄は兼てより山鹿甚五左衛門から傳授に相  
成つたる山鹿流の陣太鼓を打らならし懸け引きをいたし表門よりは大石  
良雄裏門より大石良金四十七人吉良邸の前後より取圍み乱入いたしたが  
吉良家に於ても中々の武者者が居り防ぎ戦つたケレども此方は死物狂ひ  
主君の仇を討ちたい一心ですから堪らない直ちに進んでん義英の寢所へど  
踏込んだが見當らないトウ 炭部屋に隠れて居るとあるを竹林唯七と



義士銘々傳畢

十六  
 云ふ義士の内では随分無法者といはれた人物だか此唯志が見付け出し首を擧げて見ると野方なき主君の爲めに受けたる恨みの刀傷が額にありましたソコで敵の首が手に這入ればモーたものだ之よ火の用心をいたし吉良の邸を引き揚げて高輪の泉岳寺なる亡君の墓前に上野介の首を手向け夫れから大石良雄を始め順々に焼香をいたしたのが早速時の老中へ一伍一什を自首いたしお届けに及んだから夫々吟味の末四十七人の者は死を賜ひて切腹仰せつかつた中には忠臣義士の志を憐れみ扶けて遣りたいと云ふ方もあつたが遂に衆議一決切腹と云ふことになりました未だに香花の絶へぬ高輪泉岳寺義士の美名は忠臣蔵と共に世上に傳へられて名高いお咄して侈座いますエ、は退屈さま……

明治三十三年四月八日印刷  
 明治三十三年四月十三日發行

編輯者兼  
 發行者

東京市淺草區黒船町十五番地  
 瀨山佐吉

印刷者

東京市神田區南乗物町十五番地  
 大場沃美

印刷所

東京市神田區南乗物町十五番地  
 龍雲堂

不許複製

發行所

東京市淺草區黒船町十五番地  
 順成堂



義士銘々傳畢

十六  
 云ふ義士の内では随分無法者といはれた人物だか此唯七が見付け出し首  
 を擧げて見ると四四方なき主君の爲めに受けたる恨みの刀傷が額にあり  
 ましたソコで敵の首が手に這入ればモーたものだ之よ火の用心をい  
 たし吉良の邸を引き揚げて高輪の泉岳寺なる亡君の墓前に上野介の首を  
 手向け夫れから大石良雄を始め順々に焼香をいたしたが早速時の老中へ  
 一伍一什を自首いたしお届けに及んだから夫々吟味の末四十七人の者に  
 は死を賜ひて切腹仰せつかつた中には忠臣義士の志を憐れみ扶けて遣り  
 たいと云ふ方もあつたが遂に衆議一決切腹と云ふことになりました未だ  
 に番花の絶へぬ高輪泉岳寺義士の美名は忠臣蔵と共に世上に傳へられて  
 名高いお咄して傍座いますエ、此退屈さま……

明治三十三年四月八日印刷  
 明治三十三年四月十三日發行

編輯者兼  
 發行者

東京市淺草區黒船町十五番地  
 瀨山佐吉

印刷者

東京市神田區南乘物町十五番地  
 大場沃美

印刷所

東京市神田區南乘物町十五番地  
 龍雲堂

不許複製

發行所

東京市淺草區黒船町十五番地  
 順成堂



